

全国科学博物館協議会

全科協

vol.46 NO.4

News

平成28年7月1日発行 通巻第269号

〒110-8718 東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898

<http://jcs.jp>

JCSM

Japanese Council of Science Museums Newsletter

特集「第23回研究発表大会より」

Contents

P2 ▶ 特集 | P10 ▶ 海外博物館事情 | P12 ▶ 7月8月の特別展等 | P14 ▶ リニューアル情報 | P15 ▶ トピックス



第23回研究発表大会より

科学系博物館における展示の新しい可能性 — 事実の伝達と演出のチャレンジャー

平成28年2月26日、第23回研究発表大会が富山市科学博物館を会場に開催され、115名の参加者がありました。

今回の研究発表大会では、最初に富山市科学博物館の渡辺誠氏に「江戸時代後期加賀藩での精密な時刻制度と測量」と題して講演いただき、次に、維持会員であるAGC保険マネジメント株式会社および株式会社JVCケンウッドの二社にそれぞれ「情報漏洩とサイバーリスク保険について」、「4K3D映像の活用事例」というテーマで研修会を行っていただきました。

その後の分科会では、「科学系博物館における展示の新しい可能性」をテーマに17件の口頭による事例発表が行われました。講演内容、事例発表内容につきましては、冊子資料として各加盟館園の皆様にお配りしていますので、本号ではポスターセッションの発表を中心にご紹介します。

館種や規模など加盟館園の多様性が表れた事業事例になりましたが、皆様の館運営のお役にたてば幸いです。



郵便局と博物館 ～地域連携の事例と可能性～

伊丹市昆虫館・公益財団法人伊丹市文化振興財団 野本 康太・奥山 清市・坂本 昇
伊丹市昆陽北郵便局 中嶋 廣幸 伊丹桜ヶ丘郵便局 塚 洋之 伊丹美鈴郵便局 吉井 啓

1. 博物館と郵便局

兵庫県伊丹市にある伊丹市昆虫館と伊丹市内郵便局(全20局)は2009年から2016年現在まで、様々な連携を通して地域の自然や手紙文化の大切さを伝え、市民の暮らしを豊かにするための取り組みを行っている。地域に根ざした連携事例として、街の博物館(生涯学習施設)と街の郵便局(地域生活基盤)との小さなコラボを紹介する。

2. きっかけは切手から

2009年、当館は日本郵便のオリジナル切手作成サービスを利用して昆虫館オリジナル切手を製作した。これを機に、街の郵便局との小さなコラボが始まる。同年にコラボ企画第一弾となるフレーム切手「昆虫図鑑」を、2010年に「昆虫図鑑切手 part2」を、さらに2015年に「昆虫図鑑切手 part3」を製作し、伊丹市及び尼崎市内の77郵便局にて計4,000シートを販売した。昆虫館では記念展示「切手になった昆虫たち」を開催し、好評を博した。また郵便局長を講師に迎え、いきもの切手を使った絵封筒づくりも実施している。

3. 博物館と郵便局 小さなコラボいろいろ

3-1 展示や鳴く虫でコラボ

市内郵便局にて昆虫館の企画展や特別展のポスター掲示及びチラシ配布、昆虫標本展示などを行っている。

伊丹の秋の恒例行事「鳴く虫と郷町」期間中には各局内にてスズムシやキリギリスを飼育展示している。

3-2 ゴミ拾いでコラボ

地域を流れる猪名川の流域全体で行われる清掃活動

伊丹市昆虫館 × 伊丹市内郵便局

博物館と郵便局 地域連携の事例と可能性

野本康太、奥山清市、坂本昇(伊丹市昆虫館) 中嶋廣幸、塚洋之、伊丹美鈴(伊丹市内郵便局) 吉井啓(伊丹市郵便局長)

街の博物館と郵便局がコラボしたら面白いことできるかも!?

「地域に根ざした活動で人々の暮らしを豊かにしたい!」

1. 昆虫館と郵便局

兵庫県伊丹市にある伊丹市昆虫館と伊丹市内郵便局(全20局)は2009年から2016年現在まで、様々な連携を通して地域の自然や手紙文化の大切さを伝え、市民の暮らしを豊かにするための取り組みを行っている。地域に根ざした連携事例として、街の博物館(生涯学習施設)と街の郵便局(地域生活基盤)との小さなコラボを紹介する。

2. きっかけは切手から

2009年、当館は日本郵便のオリジナル切手作成サービスを利用して昆虫館オリジナル切手を製作。これを機に、街の郵便局との小さなコラボが始まる。同年にコラボ企画第一弾となるフレーム切手「昆虫図鑑」を、2010年に「昆虫図鑑切手 part2」を、さらに2015年に「昆虫図鑑切手 part3」を製作し、伊丹市及び尼崎市内の77郵便局にて計4,000シートを販売した。昆虫館では記念展示「切手になった昆虫たち」を開催し、好評を博した。また郵便局長を講師に迎え、いきもの切手を使った絵封筒づくり(右上)も実施している。

3. 小さなコラボいろいろ

「生きものや地域の展示に郵便局のみなさんも送迎!」
2009-2015 展示でコラボ 鳴く虫でコラボ

「市民の目を通した地域の自然が大発見。疫病をまきつけに初めて開催する人も!」
2012-2015 絵封筒でコラボ

市内郵便局にて昆虫館の企画展、特別展のポスター掲示及びチラシ配布、昆虫標本展示などを行う。伊丹の秋の恒例行事「鳴く虫と郷町」期間中には各局内にてスズムシやキリギリスを飼育展示している。

「地域を流れる猪名川に一緒に清掃!」
ゴミ拾いでコラボ 2013-2016

猪名川クリーン作戦に伊丹地区実施団体として参加。地域住民と協力しメボタルの生息場所を含む河川敷の清掃活動に取り組む。

4. あなたの街でもできるかも

当館と市内郵便局は、だいたい月に1度のペースで情報交換を行っている。今後もお互い気楽に無理せず、小さなコラボを続けたいと考えている。「地域社会」に根ざした活動という点で、郵便局は博物館の先を行く存在である。街の郵便局との連携から我々博物館が学ぶことは多いのではないだろうか。博物館と地域社会との関わり方の一つとして、博物館と郵便局、一見関係なさそうな連携が、実はいろんな連携ネタが転がっているのかも知れない。

「猪名川クリーン作戦」に伊丹地区実施団体として参加した。地域住民と協力しヒメボタルの生息場所を含む河川敷の清掃活動に取り組んでいる。

3-3 絵はがきでコラボ

伊丹市民を対象に「伊丹の自然絵はがき」を募集する企画である。市内郵便局を窓口として、希望者に専用はがきを渡し「伊丹の自然」をテーマに絵を描いてもらう。作品は郵便局窓口で各局ごとの風景印が押され、昆虫館へ配達される。応募作品（毎年300～400点）全てを昆虫館企画展「伊丹の昆虫と自然」会場にて展示、その後各郵便局や市立図書館などで展示している。応募者へは郵便局窓口での作品受領の際、昆虫館入館券付きはがきを手渡しし、作品展示期間内に昆虫館への来

館を促している。応募をきっかけに初めて、もしくは数年ぶりに来館する方も見られる。

4. あなたの街でもできるかも!?

「地域密着が合言葉、博物館と郵便局、連携ネタは無限大」

当館と市内郵便局は、月に一度のペースで情報交換を行っている。今後お互い気楽に無理せずに、小さなコラボを続けたいと考えている。「地域社会」に根ざした活動という点で、郵便局は博物館の先を行く存在である。街の郵便局との連携から我々博物館が学ぶことは多いのではないだろうか。博物館と地域社会との関わりの一つの形として、博物館と郵便局、一見関係なさそうな間柄だが、実はいろんな連携ネタが転がっているのかも知れない。

企画展の新たな試み

～成人教育的視点に基づく空間づくりと企業、研究機関とのコラボレーション～

群馬県立自然史博物館 姉崎 智子

◆はじめに

本発表では、「自然と人間の共生」をテーマに、「生物多様性の保全」「持続可能な社会」について一般に普及することを目的に企画・実施した企画展について紹介した。展示では、情報を「楽しく」伝え浸透させていくために「体感」、「共感」、「実感」をキーワードに、「音」「光」「香り」「視覚」「体験」による空間づくりを試みた。

◆企画展「闇夜の動物たち」(2014.10.4～2014.11.30)の展示内容

- (1) 展示コンセプト：身近に生息する夜行性動物を知り、触れ、共存について考える。
- (2) 展示室の演出：展示室内の照明を落とし暗闇を創出。双方向性の体験型を多用した。
- (3) 展示コーナーの空間要素：①闇夜の世界へようこそ(視覚、音、体験)、②夜の森(体験、光、音、視覚)、③北の大地と④南の大地(視覚、音、体験)、⑤海中散歩(香り、体験、光、視覚、音)、⑥夜が明けて(音、光)。

◆企画展「たべる。」(2015.10.3～2015.11.29)の展示内容

- (1) 展示コンセプト：たべることは、生きること。日々の食卓、食べることを見直そう。
- (2) 展示室の演出：色鮮やかな明るい室内で、体験型を多用。
- (3) 展示コーナーの空間要素：①おいしい色、音(音、視覚、体験)、②おいしいってなに?～おいしさのメカニズム

- ～(音、視覚、香り、体験)、③日本の食、世界の食(体験、視覚、音)、④動物の食、植物の食(光、視覚、体験)、⑤生きている限り 食べ続け 排泄し続ける(体験、香り、視覚、光)、⑥命の輪(視覚、音)。

◆来館者の反応と今後の方向性

成人教育学の分野においては、成人は学習を通してそ



れまであたりまえと考えていた「前提」や価値観を批判的に振り返ることによって、内面的な変化がもたらされることが指摘されている。「闇夜の動物たち」については、「リアルで夜の森にいるようだった」等のコメントが多く認められた一方、「たべる。」では、「大人が楽しめる展示。「食」の大切さを子供に教えたい。」「私は都会で農業をしています。食べ物の大切さを改めて考えさせられました。」「自然に自分の立場を考えられるようになっていた。それぞれ

のテーマも日常生活と関わりがあって興味深かった」など、来館者に意識の変化があったことが伺えた。来館者の評価が高かったコーナーの空間構成要素をみると、来館者が「体感」「共感」し、「実感」するには「音」「光」「香り」「視覚」「体験」のうち、少なくとも「音」と「視覚」の連動、「体験」の組み合わせが効果的であり、「香り」「光」の2要素についても取り込むことができればより効果が高まることが示唆された。

自然をまねる ～ピンポン球なだれによる自然現象の体験と理解～

富山県立山カルデラ砂防博物館 飯田 肇・菊川 茂・福井幸太郎・丹保 俊哉

富山県立山カルデラ砂防博物館では、展示やイベントを通して、立山の自然の魅力を伝えるとともに自然の脅威についても紹介することに勤めている。

2014年夏に開催した企画展「立山登山-山岳の魅力とリスクを考える-」でも、立山の自然の魅力を伝えるとともに、立山で大きな遭難事故を起こした雪崩について疑似体験してもらう、大規模な実験を実施した。もちろん雪を落とさせるわけにはいかないので、代わりに使用したのがピンポン球だ。雪とピンポン球は全く別物のようだが、密度や粒の集まりであることに共通点があり、模擬雪崩の中に入って安全に衝撃を体験することができる。このため、研究面のみならず、雪崩の運動や危険について一般の方に広く認識してもらう上でもたいへん有効な手法である。ピンポン球雪崩実験は、これまで、スキー場ジャンプ台や科学実験イベント等で、野外で行われてきた。しかし、設置や球の回収、天気等の問題があり単発で終わることがほとんどであった。そこで今回は、博物館屋内の3階吹き抜けエントランスホールに、長さ13m、幅90cm、傾斜30度の斜面を作り、ピンポン球最大1万個を流す実験を、企画展開催中毎日実施した。

1粒ではごく軽いピンポン球だが、1万個集まり流れ下ると、その先端速度は時速15kmに達して、実際の雪崩



包み込まれるような映像体験。

Media Globe Σ

「Media Globe Σ」は、最新の家庭用4Kテレビの、更に約4倍の高精細映像をお楽しみいただける、「8K」の投影解像度を持つ最新プロジェクタを搭載し、コニカミノルタの持つ先進の光学技術との融合により、高精細・高臨場感溢れる映像を、スクリーン全天に映し出します。

コニカミノルタ プラネタリウム株式会社 <http://www.konicaminolta.jp/planetarium/>

BINOMURA <http://www.nomurakougei.co.jp/>

Prosperity Partner
NOMURA
世界に、歓びと感動を

株式会社 乃村工藝社
本社：東京都港区台場2-3-4 TEL：03-5962-1171(代表)

に遭遇した時に近い恐怖感や衝撃力を体感することができ。また、雪崩は、定常状態に達すると先端が大きく膨らみ頭部を形成し、後方は尾のように長く伸びた形となる。ピンポン球の雪崩においても同様の形が認められ、実際の雪崩の運動形態をうまく再現していることがわかった。

実験は、7月23日から9月25日までの期間中毎日実施し、延べ250回、約13,000名の方に体験してもらうことができた。博物館内には連日歓声や驚きの声が響き大好評

であった。

ただし、現段階では、連日ピンポン球数万個を回収し3階まで運搬する過程が自動化されていないので職員に大きな負担がかかっている。この点をクリアできれば、本館には屋内で長期にわたり実験を行える好条件が揃っているため、毎夏恒例の催しにしたいと考えている。

展示協力：納口恭明（独立行政法人国立防災科学技術研究所）、西村浩一（名古屋大学大学院環境学研究科）

博物館で学んで発信！ 展示をつなぐ「ちば生きもの科学クラブ」活動報告

千葉市科学館 針谷亜希子

◆はじめに

今回の大会のテーマは「科学系博物館における展示の新しい可能性-事実の伝達と演出のチャレンジャー-」である。博物館における「事実」が展示物そのものであるとすれば、「演出」とはその事実の伝達のために行われる教育普及プログラム全体を指す、とも捉えられる。今回は千葉市科学館で行っている博物館連携企画「ちば生きもの科学クラブ」を例に、多様な博物館の展示物をテーマに沿ってつなぎ、活用した取り組みを紹介する。

◆ちば生きもの科学クラブについて

ちば生きもの科学クラブ（以下、クラブという）は2012年度に始まり、年度ごとに異なるテーマ（シカとカモシカ、鳥類、ウマ）で複数の博物館および図書館・高校・大学・NPO法人等と連携し、年8回程度の連続講座を小学校4年生～シニアまで・20～25名を対象に行ってきた。

クラブの特徴は、①それぞれの施設の特質を生かした学びの機会の提供 ②多様な世代・職種（市民ボランティア含む）の人々がともに学び合う場作り ③各自が主体的に考え活動し、クラブ生自身も発信者になること、である。そしてこのクラブを通して生きものや自然を科学的に観て

楽しむ姿勢を養い、人間とその他の生きものとのかかわりについて理解を深めることを目標としている。

3館園連携 ちばっとプロジェクト
博物館で学んで発信！
～ちば生きもの科学クラブ 活動報告～

2015年度 スケジュール

今年度のテーマ
～ヒトには聞こえない音の秘密～ (科学館)

5月 ①オリエンテーション (動物公園)

6月 ②コウモリのふしぎー熊倉家
～ヒトには聞こえない音の秘密～ (科学館)

7月 ③コウモリを捕まよう①
～食事と体のつくり～ (動物公園)
④調べ方・まとめ方・伝え方を学ぼう
～図書館を活用しよう～ (図書館)

8月 ⑤ネットディテクターを作ろう
～電子工作-基礎1～
[協力:千葉市中央図書館]

9月

10月 ⑥コウモリを捕まよう②
～コウモリの声を聞こう～ (中央博物館)

11月 ⑦コウモリと狐とも
～コウモリとの付き合い方～ (科学館)

12月 ⑧発表会 (科学館)

1月

2月

各月で作品制作
発表会発表

ここを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

Tanseisha

株式会社 丹青社 2015年9月 本社を移転しました
〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19階
TEL | 03-6455-8100(代表) URL | www.tanseisha.co.jp
札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・福岡・那覇・北京・上海

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショッパ向/教育用地学標本



since 1974

地学標本/化石・鉱物・岩石
古生物/レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks
株式会社 東京サイエンス
TEL.03-3350-6725 FAX.03-3350-6745
http://www.tokyo-science.co.jp
E-mail: info@tokyo-science.co.jp
〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イウォ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

2015年度は「空を飛ぶ哺乳類『コウモリ』のひみつ」と題しクラブ活動を行った。活動内容はポスターをご覧いただきたい。生体・標本の観察、音の実験、電子工作、研究者との対話などコウモリをキーワードに様々な講座を行った。

◆クラブ生の作品の巡回展示と来観者の反応

クラブ生が講座外で行う活動に発表会に向けての課題研究(作品制作)がある。発表会では各自がポスター発表を行い、その後クラブの概要と年間の活動を紹介するポスターとともに、連携館園や図書館などに巡回展示される。来観者のアンケートを見ると、「小学生なのにすごい」といった反応が目立っていた。同世代の小学生の目を引くと同時に、大人世代の関心(感心)を引き付ける様子も見られた。これは博物館側のねらいの一つである「展示をより身近なものとして目に留めてもらう」はある程度効果があったと判断できる。一方で、作品ができるに至ったクラブ活動そのものに関する言及は少なく、博物館活動の発信のためにはまだ工夫が必要であると考えられる。

◆おわりに

様々な博物館が連携して教育普及プログラムを実施することで、実物と実体験に根ざした学びの機会提供というだけでなく、対象について多角的視点からの総合的な理解に寄与できると考えられる。また今回クラブ生や保護者のアンケートから、博物館がそれぞれ独自に持っている展示物が、テーマや文脈によって異なる見え方をし、新たな発見が生まれることを実感し、博物館や展示の奥深さ(多層性)に触れる機会にもなっていることが分かった。現状では作品巡回展示はクラブ生の発表の機会の提供という意味合いが強いが、クラブ生自身による情報発信を通じて、地域の資源を活かした生涯学習のあり方の提案と普及に貢献できればと考えている。

ちば生きもの科学クラブは(公財)中谷医工計測技術振興財団 科学教育振興【プログラム】助成を受けて実施しました。

科学リテラシー涵養活動の概念をもとにした展示・研修事業


国立科学博物館 神島 智美・久保 晃一・茂田由起子・小川 義和

国立科学博物館では平成18~21年度に開催した有識者会議において科学リテラシー涵養活動の意義やあり方について検討し、活動の体系化をおこなった。この体系では、展示やワークショップ等の学習プログラムにおける目標を4つ(感じる・知る・考える・行動する)に分けて対象者のライフステージごとの枠組みに整理した。これは科学リテラシー涵養に向け、目標を持って学習機会を提供する必要性があると考え、学習支援事業を体系的に整理する意義を提案したものである。

そして、全国の科学系博物館の学習支援事業の実態を

調査するため、各館のプログラムをこの体系に位置づけて収集した。その結果、プログラムの主対象は「小学生以上」が一般的であり、全国的に「未就学世代向け」は多くないという課題が見られた。

そこで当館では、未就学世代への科学リテラシー涵養(特に「感じる(感性の涵養)」「考える(科学的思考習慣の涵養)」を重視)のため、平成27年7月に新しい展示室モデルとして「親と子のたんけんひろば コンパス」を開設した。主な対象を4~6歳の未就学世代とその保護者とするコンパスでは、「保護者は外界との媒介者である」という言葉



Panasonic

Core Products
Security
Communication
Office
Infrastructure
Terminal System
AVC Network

Total Solution
マーケティング・セールス
システムインテグレーション
設置・施工
保守・メンテナンスサービス
クラウド・運用サービス

panasonic

パナソニック システムネットワークス株式会社 システムソリューションズジャパンカンパニー
詳しくはホームページで panasonic.co.jp/avc/psn/ssj/

— ご希望の恐竜・化石・動物・人類の
標本及び模型を探しご案内いたします —

マラウイサウルス
ティタノサウルス科
全長—10m



株式会社 ゼネラルサイエンス コーポレーション
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-11-8
TEL:03-5927-8356 / FAX:03-5927-8357
e-mail: gsc@shibayama.co.jp
<http://www.shibayama.co.jp>

をもとに、接触や協同、共有といった「親子のコミュニケーション」を促し、それを通じて親子共通の体験を家庭という日常に持ち帰ってもらうことを意図している。そのために、剥製群の中をめくりながら観察を促す「カハクのマド」、昆虫などの樹脂包埋標本を観察する「みるみるテーブル」、自然や科学技術を素材とした絵本などを配架した「ライブラリ」といった展示はもちろん、親子で一緒に行うワークショップ等、コミュニケーションに通じる仕掛けをふんだんに用意している。コンパスの効果については現在アンケート等を用いた調査を行っているが、家庭での博物館体験の振り返りが見られ、「感性および思考習慣の涵養」に効果が現れていることが確認されている。未就学世代の科学リテラシー涵養という「目標の明確化」、および対象や手法等の「文脈の整理」に基づく展示活動を行ったことが、一定の効果につながっているといえるだろう。

当館ではこのような事例を活かし、「目標の明確化」および「文脈の整理」について学ぶ一日程度の学芸員向け出前研修を実施している。研修により、冒頭で述べた「科学リテラシー涵養に向けた目標を持った学習機会の提供」が各館において活かされ、展示やプログラムへの活用が継続的になされることの一助となれば幸いである。コンパスの

視察および研修のご要望については、compass@kahaku.go.jp までお気軽にお問い合わせいただきたい。

科学リテラシー涵養活動の概念をもとにした展示・研修事業
 神島智美 久保晃一 茂田由起子 小川義和

科学リテラシー涵養活動の体系

目標	世代	小学生以上	小学生以下	未就学児
感じる	感性の涵養			
知る	知識の涵養			
考える	思考力の涵養			
行動する	実践力の涵養			

学習プログラムにおける目標を右記4つに分類し、対象者の世代ごとに整理・枠組みを作成しました。また全国の科学系博物館における学習支援活動の調査を行い、枠組みに位置づけて傾向を調査し、その結果をデータベースにまとめました。(686件登録済)

課題
全国的に小学生以上を対象としたプログラムがほとんどであり、未就学児向けのプログラムが極めて少ない。

コンパスの開発
4～6歳とその保護者を主な対象としたコンパスでは、「遊び」の要素の中に「親子のコミュニケーション」を促す仕掛けを用意し、保護者との共通した体験を通じて未就学児の科学リテラシー涵養を促します。

コンパスの遊びを促す展示構成

- カハクのマド
- みるみるテーブル
- ライブラリ

学芸員向け研修事業の実施
科学リテラシー涵養活動の概念と展示室「コンパス」の事例をもとにした研修をおこなっています。

関係者のメリットを考慮したプログラムの作成
 スタッフ・来館者・博物館それぞれの立場に立って、関係者のメリットを考慮したプログラムの企画・実施・評価を行います。「コンパス」の事例紹介も交えつつ、事業の目標明確化の必要性についても考えます。

枠組み作りを通じたプログラムの分類
 学習支援事業の目標を明確にするため、参加者独自の枠組みをつくって既存のプログラムを分類し、それぞれの館の傾向を把握します。館の使命と学習支援事業の目標の関係についても合わせて整理します。

その他ニーズに応じて研修を行っています。
 コンパスの複製や研修のご要望については以下までお気軽にお問い合わせ下さい。
 sc@kahaku.go.jp

特別展「地球の結晶～北川隆司鉱物コレクション～」における展示の工夫

富山市科学博物館 増淵 佳子

1. はじめに

富山市科学博物館では、平成27年7月18日から9月6日まで特別展「地球の結晶～北川隆司鉱物コレクション～」を開催した。この展示の中心となった北川氏の鉱物標本216点は、国立科学博物館を始めとし全国の博物館で巡回展示されたものである。当館ではこれらに加え、北川氏および当館の所有する鉱物標本約100点と、宝石の直輸入などを行っている富山市内の宝石業者(有)J.C.BARの所有する宝石標本約100点、合計約420点からなる企画展を構成した。本報告では、筆者が展示を構成するうえで行った諸工夫の一部を紹介する。なお本報告の詳細版は、富山市科学博物館研究報告第40号(2016年6月末発行)に掲載されているので、そちらも参照されたい。

2. 展示の狙いと工夫

北川氏のコレクションは色や結晶の形が美しく、展示映えのする標本であったため、本展では、鉱物の色や結晶

の形の美しさを伝えるとともに、鉱物の様々な楽しみ方を紹介することを狙いとした。

展示を構成する上で、標本そのものに注目してもらえるよう、様々な工夫を行った。例えば、標本数が多いことにより展示室内が煩雑な印象にならないよう、また、鉱物の色の美しさや多様さを際立たせるため、バックパネルや展示台の色は床・壁面と合わせた濃紺・オフホワイト色を基調とした。さらに、照明はスポットライトを多用する、解説パネルのボリュームは少なくする、ラベルは透明のシールに印刷し展示台に貼付するなどにより、展示室内で標本が主役となるよう配慮した。ショーウィンドー内にはひな壇型の展示台を設置し、色鮮やかな鉱物を色順に陳列した。これらは展示室入口の正面奥に位置するため、本展を印象づける特徴的な展示となった。また美しい標本をより美しく見せるため、誕生石のコーナーでは、標本の下にアクリル製のミラー板を敷いた。

小さな子どもや鉱物に興味をもたない人でも楽しめるよう、体験型・参加型のコーナーも用意した。例えば、マグネットを使って様々な形・模様を作ることで鉱物の形を知ったり、標本を眺めながら鉱物が登場する絵本などを読んだりできるようにした。

3. 展示の効果

来場者アンケートの結果をみると、印象に残った展示として、宝石、鉱物の色、鉱物の形と回答する方が多く、本展の狙いは概ね達成したといえる。一方で、自由記述では「きれいだった」という感想が多く見られ、来場者の知的好奇心や科学的な思考を促す部分が少なかったことが課題として見えた。

最後に、本展にご協力いただいた多くの皆さまに、心より感謝申し上げます。



科学系博物館における展示の新しい可能性 — 事実の伝達と演出のチャレンジ —

千葉市科学館／日本サイエンスコミュニケーション協会 高安 礼士

1. はじめに

全科協の平成 27 年度第 23 回研究発表会は、科学系博物館にとって基本中の基本であるテーマで「科学系博物館における展示の新しい可能性」であった。昨今、TV番組やショッピングモール等で行われるサイエンスショーと人気を競うようにして、科学館における展示や演習プログラムが過度な演出で実施されているのではないかと、また「事実の伝達」や「科学の原理や成果の紹介」を本来の使命とする科学系博物館における「展示の現状」と今後の新しい可能性を見つけようとする趣旨であった。

今回の研究発表内容を見ると、いくつかの類似した内容に分類できる。一つ目は、直接的に新しい科学領域に則した新しい展示構成を目指したものであり、二番目はその展示の活用方法の工夫によって「新しい可能性」を見いだそうという試み（いわゆるサイエンスコミュニケーションとしての展開）である。また、このような展示や演習の新しい試みの他に、展示以前の調査研究や博物館運営体制に関するマネジメントの工夫に関する発表もあり、さまざまな視点から論じられた本大会は実りの多いものであった。

2. 科学博物館の新しい動き

今回の研究会では、2017 年の世界科学館会議、2019 年の ICOM 世界大会の開催と文部科学省の全国の博物館と予算の動向などの博物館を取り巻く予定や取り組み状況の説明があり、更に科学と技術の基本的な関係などを解説・提言する「記念講演：基礎科学と技術」と「講演：科学系博物館における情報の共有について—標本・資料情報のオープン化への課題—」が行われた。これらの企画は、今後数年間にわたって科学系博物館の展示を始めとする様々な活動に密接に関係するもので、展示の新しい可能性を考える際に不可欠のものであり、「科学研究の実状」と「博物館資料の情報化」を深く考え、実装化する意味で有意義であった。

昨年の研究大会のテーマである「安心・安全の科学技術と科学教育」の＜科学系博物館での展開＞として、「安全・安心の科学技術（知識）」領域では

- A. 知識・技術習得学習
- B. 構成主義的学習
- C. 形成的学習
- D. 推論的学習（アブダクション）

F. 意見調整型学習

などの5の手法を紹介したが、今研究大会の発表においても、展示を新しい科学の知識体系の伝達と捉えて、Aタイプの実践事例発表が数多くあり、BやCタイプは若干の例がある程度であった。展示活動がテーマであったためか、「不確かな科学技術情報(知識)」領域に関する発表は少なかった。

その中でも、自然史系博物館における『「科学館的手法」への試み』と「自然史系博物館における子どもワークショップの展開と課題」は、先進的方法の試みとして注目されてよいものであろう。特に後者については、「子ども自らが発見する」ことに力点がおかれ、博物館学習では見逃すことのできない手法であろう。徳島県立あすたむらんどこども科学館の「夜間開館における展示物の利用」は、展示物のもつ多面的な価値や意味を多様に活用する例として、岐阜県先端科学技術体験センターの「リピーター来館を促すワークショップによる展示」は、展示のみならずワークショップ等を含めた「教育普及事業全体の新しい意味」の構成を行っており、新しい博物館学習の到来を予想させる発表であった。

3. 展示におけるサイエンスコミュニケーション

今回の発表大会で特徴的であった点として、展示や教育普及活動を「サイエンスコミュニケーション」として捉え直して、事業展開を企画している事例が多かったことがあげられる。「リピーター来館を促すワークショップによる『展示』」(岐阜県先端科学技術体験センター サイエンスワールド)や「対話を生む展示室を目指して」(仙台市天文台)はそのようなものを運営方針やマネジメントの立場から論じたものと理解できる。その他にも、サイエンスコミュニケーションの技法を用いた事例発表として、「対話型展示」や「対話型学習プログラム」を用いたものが数多く見られた。

4. 展示とサイエンスショーの実施指針

昨今の科学博物館における展示活動は、従来の静的展示と動態展示は勿論のこと、さらに演劇まで加えた解説活動、研究者によるギャラリートークに加え、舞台上でのサイエンスショーの多種多様な手法が採用されている。さて、これらのさまざまな展示活動はどのような目的で表現手法は選択されているのだろうか。

昨今の展示技術の進歩による新しい表現と科学ショーなどに見られる「演出技術」を科学系博物館は、どのように考えるべきであろうか。過度な技術依存や過度な演出は、避けるべきことであるが、では一体適切と言われる基準はどのような

ものか。結論から言えば、ある時期における映像やコンピュータのインタラクティブ的な利用の経験から学べると思うが、時代の価値や環境の変遷によりその適切さは、表現者と受手の経験・熟成に応じて変化する。

日本における演示実験や科学ショーは、多くの場合説明的であり正しい知識の伝達に偏りがちで、学校教育で見られる「段階的な学習」で学習指導要領を意識したものである。課題の認識や探究的な学習または最近では学校教育でも強調される「能動的学習(アクティブラーニング)」、場合によっては「構成主義的学習」方法がもっと意識的に採用されて良い。

例えば、千葉市科学館では「千葉市科学フェスタ」の「コミュニケーション・ポリシー」として、フェスティバルへの出展者へのお願いとして示している。これらの方針は、科学は変容するもの、専門家と市民が対等の立場で科学を語り合うことを指針として示している。

表 千葉市科学フェスタの「コミュニケーション・ポリシー」

- ① 誰もが同じ目線で語ります。
- ② 科学の楽しさを尊重し、感動を共有します。
- ③ 多様な価値を尊重し、幅広い活動で交流します。
- ④ 科学的論拠に基づく出展内容を提供します。
- ⑤ 社会のための科学、社会の中の科学を考えます。

これまで、科学館における展示計画や教育プログラムの中で、構成主義的学習理論に基づくものは多くあるわけではなかったが、このような「ポリシー」を指針として展示活動や教育普及活動を進めることは一つの解決方法であろう。

5. まとめ

本原稿執筆の現在も熊本地震が進行中で終結してはならず、科学の力が再三問われる状況である。このような状況下では、単純に「科学を楽しむ」と言ったキャッチフレーズでは非難の声を免れず、より地域や社会の状況に寄り添った「科学館の使命」と「その具体的展開」が求められる。科学系博物館で行われている「歴史的展示」や「原理解説展示」は変更が難いため、それらをさまざまな視点と手法を活用した「コミュニケーション・ポリシー」の確立が館の使命の一つとなり、「ギャラリートーク」や「演出解説」などの基準となるであろう。また、演示実験施設などの科学ショーの舞台を持つところでは、「視点・目標の今日化」と「運用プログラムの普段の改訂」で対応するしか方法はないのではないだろうか。



■ 企画展・特別展

カナダ各地で、科学展示「本当かウソか？」展を巡回中

挑戦的なタイトルをもつ科学展「本当かウソか？」が、カナダ各地の科学博物館等で巡回中である。同展は、もともとモントリオールから東100キロほど離れた地方小都市シャープブルック（ケベック州）にあるシャープブルック自然科学博物館で企画制作され、2014年に同館を皮切りにケベック州と隣接するオンタリオ州の科学博物館等を経て、現在はケベック州シャウィニガン市のレオ・アヨッテ美術館で開催中（2016年5月26日～10月2日）である。

「本当かウソか？」は、三つのテーマで構成されている。「自然と動物」「人々と栄養」「科学と技術」。それぞれに、数人が同時に参加できる小テーマ（設問）のゲーム式の展示が用意され、展示演出に映像や人形劇の上演などが用いられている。「チョウは、足を使って味を確かめるのか?」「カップ麺は、感冒の症状を和らげるのか?」「大きい磁石は小さい磁石より磁力が強いのか?」といった設問が随所に設けられ、それぞれの答えに詳しい解説がグラフィックと映像で用意されている。シャープブルック自然科学博物館は中小規模の巡回展の企画開発を多く手がけている博物館として知られており、「髪の毛が伸びるしくみ」「ワクチンの科学」「都市周辺の野生生物」「中南米のハチドリ」「夜行性動物の生態」「カナダ沿海のサメ」「違法な動物取引の闇市場」「先史時代のカリブーの狩猟民」「隕石」「幹細胞」「科学とアート」「1922年にカナダ東部を襲った大火事の記録」などのユニークな巡回展を用意している。

True or False - The Fun Science Exhibition.

Musee de la nature et des sciences de Sherbrooke.
Sherbrooke, QC.

<http://www.naturesciences.qc.ca/en/event/true-or-false/>

ロンドン大グラント博物館で、想像上の動物図譜展を開催

古今東西の画家にとって、いまだ自分の目で見たことがない動物の生きた状態の姿を描くことは、極めて困難である。さらに本人にとって挑戦し甲斐があるテーマでもある。

そうした作品を集めた企画展「奇妙な動物たち：未知の動物のアート」がロンドン大学グラント動物学博物館で2015年に開催された。目玉展示は、英国の海洋探検家ジェームズ・クックが最初の航海からオーストラリアから持ち帰ったカンガルーの毛皮とスケッチを使って、当時馬を描いた作品で有名だったジョージ・スタップス（1724-1806）に委託制作させた油彩画「ニューホランドのコンゴルー」（The Kongouro from New Holland/1772年完成/グリニッチ国立海事博物館所蔵）だった。他に、デューラーが描いた有名なサイの作品（ロンドン大学美術館所蔵）も出品された。会期：2015年3月16日～6月27日。

Strange Creatures : The art of unknown animals.

University College - Grant Museum of Zoology. London.
<http://www.ucl.ac.uk/museums/zoology/visit/exhibitions/strange-creatures>

http://www.ucl.ac.uk/museums/zoology/visit/exhibitions/strange-creatures/strange_creatures_project_report

英バッキンガム宮殿で、メーリアン蝶類図譜展を開催中

英女王が住むバッキンガム宮殿といえば、毎日行われる昼前の衛兵交替式の様子で、ロンドンきっての観光名所であるが、一般に公開している美術館を併設していることは意外と知られていない。美術愛好家や美術館で仕事をしている人以外は、ロンドンっ子でさえもその存在を知らない人が多い。場所も、女王が住む宮殿の本館の真裏にある別棟にあることも、宮殿の敷地内にあるという警備上の問題とともに、その知られていない理由のようだ。ともあれ、1962年開館のバッキンガム宮殿美術館（ザ・クイーンズ・ギャラリー）は英王室が所有する美術品を所蔵し、年に数回所蔵品を紹介する企画展を開催している。コレクションには、ヨーロッパ絵画の名画が数多く含まれており、その中にマリア・メリアンが描いた有名な蝶類図譜も含まれている。

ドイツ生まれのマリア・ジビーラ・メリアン（1647-1717）は、植物や昆虫などを詳細に描いたイラストで知られ、中でも蝶や蛾の変態を緻密な観察眼と描写力で描い

た作品は昆虫学の世界で今も高い評価を得ている。メリーアンが描いたそうした蝶類の作品を集めた企画展が、バッキンガム宮殿美術館で開催されている。同展では、メリーアンが描いた水彩画50点の他、52歳に二回目の南米北部スリナム滞在での昆虫の観察記録をもとに描いた手彩色銅版画集『スリナム産昆虫変態図譜』（1705年出版）の挿絵も紹介されている。

会期：2016年4月15日～10月9日。

Maria Merian's Butterflies.

The Queen's Gallery, Buckingham Palace. London.

<https://www.royalcollection.org.uk/exhibitions/qgbp/merian-merians-butterflies>

米ブルース博物館で、大型ネコ科図譜展を開催

いまわが国は空前の猫ブームの真っ直中にあると言われている。関西大学の宮本勝浩名誉教授（数理経済学）の試算によると、このブームがもたらす経済効果「ネコノミクス」は2015年1年間で約2兆3,162億円だそう。数字の魔力に惑わされたくないが、各地で開催されているネコ展、とりわけネコを写した写真展は、どの会場も盛況であることは確かなようだ。

さて所変わって、ネコの愛好家が多いアメリカ東部のコネチカット州のグリーンウィッチのはなしである。同地にあるブルース博物館（1912年開館）で、大型ネコを描いた作品展「ロベール・ダレが描いた大型ネコ」展が開催された。フランス生まれの画家ロベール・ダレ（1923-2006）が描いた大型ネコの油彩画やスケッチ等で構成された。紹介された大型ネコは、トラをはじめ、ライオン、ヒョウ、チーター、ピューマ、ジャガー、ユキヒョウ、ウンピョウの8種。なかでも、ダレを最も魅了したのがヒョウであって、フランスを代表するファッション・ブランドであるエルメスは、1985年からダレに動物のデザインを依頼し、特にヒョウをあしらったダレの作品を好んで主力製品のスカーフに使っている。

「ロベール・ダレが描いた大型ネコ」展は、ダレ没後10周年を記念して、ブルース博物館とエルメス社が主催し、ブルース博物館での閉幕後、ヨーロッパとアジアを巡回す

ることになっている。

会期：2016年1月10日～3月13日。

Fierce and Fragile: Big Cats in the Art of Robert Dallet.

Bruce Museum. Greenwich, CT.

https://brucemuseum.org/site/exhibitions_detail/fierce-and-fragile-the-big-cats-of-robert-dallet

独ジーメンス社の新しい博物館で、心臓外科展を開催

1918年設立のジーメンス・フォーラムはジーメンス社が設立したドイツで最も古い企業博物館であり、その名（1993年にそれまでのジーメンス博物館から現在の名称に改称）は、わが国の企業博物館はもとより、産業技術博物館、あるいは理工博物館の関係者の間でよく知られている。そのジーメンス・フォーラムの兄弟館が、2014年5月にバイエルン州エアランゲン市にあるジーメンス社の医療技術の開発拠点で開館した。1893年に竣工した古い工場の建物に新しく設けられた博物館の名称は、ジーメンス医療技術博物館（Siemens Unternehmensmuseum für Medizinische Technik）であり、同社における医療技術の発展に関する常設展示と医療技術や医学に関連した展覧会を開催している。

同館で開催された「心臓の中を見る」（会期：2016年1月14日～3月12日）は、心臓外科学の最前線を紹介したものであり、ヴェストファーレン・ヴィルヘルム大学が企画制作され、2013年に同大学があるミュンスター市での皮切りに、レントゲンの生誕地のレムシャイト市のドイツ・レントゲン博物館等を巡回してきた。

Blick ins Herz.

Siemens Unternehmensmuseum für Medizinische Technik. Erhangen, Freistaat Bayern.

[http://www.siemens.com/press/en/pressrelease/?press=en/pressrelease/2014/healthcare/h201405024.htm&content\[\]=H&content\[\]=HC](http://www.siemens.com/press/en/pressrelease/?press=en/pressrelease/2014/healthcare/h201405024.htm&content[]=H&content[]=HC)

7月8月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
札幌市青少年科学館	夏の特別展「大発見!北海道恐竜展 [ハドロサウルス類の進化の謎に挑戦]」	7月23日～8月21日
釧路市こども遊学館	夏休みイベント	7月23日～8月16日
岩手県立博物館	企画展「国立博物館・コラボミュージアム in 盛岡 古生代の大量絶滅と回復-進化の影と光-」	6月7日～8月21日
盛岡市子ども科学館	2016年度特別展「昆虫ワールド」	7月21日～8月21日
仙台市天文台	はらだかおる 宇宙物語Ⅷ ～賢治と宇宙～ パートⅡ	7月21日～8月30日
	企画展 KAGAYA「銀河鉄道の夜」	7月23日～8月21日
ふくしま森の科学 体験センター	世界のカプトムシ・クワガタ展	7月16日～8月24日
郡山市ふれあい科学館	ホワイエ企画展「新発見 太陽系の姿」	7月2日～8月31日
つくばエキスポセンター	夏の特別展「ロボットと人工知能(仮)」	7月16日～9月4日
産業技術総合研究所 地質標本館	地質標本館夏の特別展示「山に関する展示(仮)」	7月20日～10月2日
栃木県立博物館	第115回企画展「日光の昆虫」	7月16日～9月19日
高崎市少年科学館	夏休み特別展「ダンボール昆虫らんど」	8月6日～8月31日
群馬県立自然史博物館	開館20周年記念展 「超肉食恐竜 T. rex」 エピソードI ティランノサウルスの時代とからだ	7月16日～9月22日
群馬県立ぐんま昆虫の森	第13回企画展「蝶・ Butterflies」	7月9日～8月28日
千葉市科学館	夏の特別展「科学捜査展season2 科学の力で見えない謎を解き明かせ!」	7月15日～9月4日
千葉県立中央博物館	生態園トピックス展「蜂の巣いろいろ」	7月5日～9月4日
	企画展「驚異の深海生物 -新たな“深”世界へ-」	7月9日～9月19日
国立科学博物館	特別展「海のハンター展 -恵み豊かな地球の未来-」	7月8日～10月2日
科学技術館	青少年のための科学の祭典2016全国大会	7月30日～7月31日
	夏休み特別展「マジカル・ケミカル研究室」	8月6日～8月28日
郵政博物館	夏休みこどもイベント「かわいいティディベア」展	7月16日～8月28日
たばこと塩の博物館	第37回夏休み塩の学習室「買い物ゲームで塩さがし!2016」	7月21日～8月31日
多摩六都科学館	夏の特別企画展「ロクト大昆虫展2016」	7月16日～9月4日
はまぎんこども宇宙科学館	夏休み特別企画「工作がいっぱい!自由研究パラダイス2016」	7月21日～8月31日
横須賀市自然・人文博物館	天神島臨海自然教育園 開園50周年記念特別展 「天神島大冒険! -海とともにくらす生き物たちの楽園-」	7月16日～9月25日
神奈川県立生命の星・ 地球博物館	特別展「Minerals in the Earth -大地からの贈り物-」	7月16日～11月6日
新江ノ島水族館	7月テーマ水槽「七夕 ～水中の星の光たち～」	7月1日～7月31日
	8月テーマ水槽「山の日」	8月1日～8月31日
富山県立立山博物館	立山×地獄展 第1部 閻魔の眼光	7月16日～9月4日
富山市科学博物館	特別展「科学捜査展 ～今日からきみも名探偵～」	7月16日～9月4日
のとじま臨海公園水族館	企画展「水中のそっくりさん」	7月9日～9月25日
福井市自然史博物館	旅をするタネ～生命のタイムカプセル～	7月16日～9月19日

開催館	展覧会名	開催期間
福井県児童科学館	夏の企画展「深海のふしぎ ～もうひとつの宇宙～」	7月23日～8月21日
飯田市美術博物館	企画展「高山のダイナミズム」	7月16日～9月25日
岐阜市科学館	チームラボアイランド 学ぶ!未来の遊園地	7月28日～8月31日
岐阜県博物館	特別展「新・恐竜学 ～鳥になった恐竜の脳科学～」	7月8日～9月4日
大垣市スイトピアセンター 学習館	夏休み企画展「宇宙を探検! ダンボールアート遊園地」	7月16日～8月28日
	第3回ふるさとの自然フォトコンテスト 入賞作品展	7月16日～8月31日
中津川市鉱物博物館	第20回企画展「美濃焼・瀬戸物と花崗岩」	7月23日～12月18日
鳳来寺山自然科学博物館	「ホットスポット新城-植物・きのこからみる新城の自然-」展	7月20日～8月31日
豊橋市自然史博物館	市制施行110周年記念事業 第31回特別企画展「メガ恐竜展 in 豊橋」	7月15日～10月10日
名古屋市科学館	平成28年度夏の特別展「南極へ行こう!!～南極観測60周年記念特別展～」	7月16日～9月4日
キッズプラザ大阪	夏の企画展2016 キッズプラザ大阪×海洋堂 キッズ ☆ フィギュア アドベンチャー～新感覚! ナゾトキで学ぶ 科学のヒミツ～	7月23日～8月31日
神戸市立青少年科学館	夏の特別展「ロボットと創る未来」	7月23日～8月31日
阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター	夏休み防災未来学校2016	7月22日～8月31日
姫路科学館	特別展「名探偵コナン 謎解きチャレンジ」 & 「科学捜査展」	7月29日～9月5日
明石市立天文科学館	特別展「時計のある風景写真展」	6月4日～7月10日
	特別展「宇宙のタイムカプセル・隕石展」	7月16日～9月4日
出雲科学館	「世界の甲虫展」2016	8月6日～8月21日
島根県立三瓶自然館	平成28年度夏期特別企画展 「ジュラシック・シー ～海の恐竜とぐるぐるアンモナイト～」	7月16日～9月25日
岡山県生涯学習センター	のぞいてみよう!わたしたちの体	6月1日～7月10日
倉敷市立自然史博物館	第25回特別展「金銀銅の自然史」	7月16日～11月3日
広島市健康づくりセンター 健康科学館	特別展(巡回展)「感覚の迷宮～世界は錯覚でできている?!～」	7月23日～8月28日
	企画展「こわおもしろ あそびの館～五感と錯覚の世界～」	7月23日～11月6日
広島市江波山気象館	夏の企画展「迷路の館へようこそ!」(仮称)	7月30日～8月28日
広島市交通科学館	企画展「思いのままに走る!トキメキのライトウェイトスポーツカー展」	7月15日～9月4日
防府市青少年科学館	夏休み特別企画「サイエンスアカデミー2016」	7月16日～7月31日
	企画展「鏡のラビリンス」	8月5日～9月4日
徳島県立博物館	トクシマ恐竜展	7月15日～9月19日
北九州市立自然史・ 歴史博物館	夏の特別展「恐竜博2016」	7月9日～9月4日
佐賀県立宇宙科学館	新・世界の昆虫展～虫の秘密とバイオミメティクス～	7月16日～9月4日
天草市立御所浦白亜紀資料館	天草市立御所浦白亜紀資料館特別展「天草ジオパークと日本のジオパーク」 ※同時開催:第18回恐竜絵画コンテスト作品展	7月16日～8月31日
宮崎県総合博物館	ワクワク!ふしぎ生物ワンダーワールド ～のぞいてみよう、生き物たちの変わった形とくらし～	7月16日～9月4日
沖縄県立博物館・美術館	目からウロコの生物実験展～今年の夏はジッケン、タイケン、大ハッケン!	7月16日～8月28日

リニューアル情報

目黒寄生虫館

[更新箇所] 2階展示室「孤高の寄生虫学者 山口左伸」

[更新内容] ①寄生虫学者・山口左伸博士の研究資料コーナーを大幅に拡充し、論文の作成に使用された原図や直筆原稿などの関連資料の展示を加えました。今回新たに整備された展示ケースにはタッチパネルモニタを組み込み、拡大すると、精巧に描かれた原図の細部にいたるまで観察することができます。

[公開日] 平成28年4月1日

[準備期間] 平成27年4月～平成28年3月

[備考] この展示は一般財団法人全国科学博物館振興財団の平成27年度全国科学系博物館活動等助成事業による助成（43万円）を受けたものです。



岐阜市科学館

[更新箇所] 常設展示室

[更新内容] 「体で実感、心が感動、科学館」を基本コンセプトに、常設展示の約6割をリニューアル。サイエンスショーを実演するサイエンスステージや、スペーストラベルが体験できる「スペースアイ」など、参加体験型の展示を多く導入し、楽しく科学を学んでいただけます。

[更新面積] 1,046㎡

[公開日] 平成28年5月1日

[準備期間] 平成27年12月1日～平成28年4月30日

[担当業者] 日展

[総工費] 278,640千円



滋賀県立琵琶湖博物館

[更新箇所] C展示室・水族展示

[更新内容] 琵琶湖博物館では、琵琶湖の環境と人々の暮らしを考えるC展示室、そして淡水生物を扱う施設としては日本最大級の規模を誇る水族展示エリアが、7月14日(木)にオープン。淡水にすむ世界で唯一のアザラシ、バイカルアザラシも関西では初めてお目見えします。

[更新面積] 3,319㎡

[公開日] 平成28年7月14日

[準備期間] 平成24年4月1日～平成28年7月13日

[担当者] 株式会社乃村工藝社

[総工費] 約14億9200万円



平成28年度 第1回理事会・総会を開催しました

平成28年6月9日、国立科学博物館において平成28年度第1回理事会・総会を開催し、74館園110名の皆様にご参加いただきました。

総会では、平成27年度の事業報告などの議事に続き、札幌市青少年科学館の石丸和正さん、島根県立三瓶自然館の矢田猛士さんより平成27年度海外先進施設調査についての報告、文部科学省生涯学習政策局社会教育課の西井知紀課長より行政説明をいただきました。また、その後の記念講演では藤井敏嗣東京大学名誉教授より「日本の火山活動の今後」というテーマでお話をいただきました。

翌10日は、たばこと塩の博物館にて施設見学を行い、36名の方にご参加いただきました。田中泰行館長のご挨拶、高梨浩樹主任学芸員の概要説明の後、自由見学にて館内を見学させていただきました。ポイントでは担当学芸員の方の解説も伺え、大変興味深い見学となりました。

なお、第2回理事会・総会および第24回研究発表大会は、京都鉄道博物館にて開催します。皆様のご参加をお待ちしています。



海外先進施設調査報告



記念講演



施設見学「たばこと塩の博物館」

銅沼を使ったフィールド学習



<http://www.bandaimuse.jp/>



次回執筆者は「雲仙岳災害記念館」の長井大輔氏です。

1888(明治21)年に噴火した磐梯山は、火山を学ぶフィールドとして最適です。その中でも、火口壁を望める銅沼は、噴火史から現在の活動までを学ぶことができます。2002年から、地元の裏磐梯中学校の生徒を連れたフィールド学習を開始し、現在も継続中で、他の学校にも広がっています。また、この学習はジオパークのジオツアーとしても利用されています。日本という国は、地震や火山の災害を繰り返す大地で作られています。その大地を現場で学んだり、ジオツアーを行うことが、日本人の地学リテラシーを高めることになります。

熊本地震による被災加盟館支援に対する 募金活動にご協力ください

4月に発生しました熊本地震による被害は、当協議会加盟館においても大小あるものの多数確認されています。当協議会では過去の例にのっとり、加盟館相互支援の観点から活動を行っていきたく考えていますが、まずは正会員館園の来館者に向けた募金活動とそれを通じた支援を実施しています。

加盟館園においては引き続きご理解ご協力のほどよろしくお願いいたします。



全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

大島 光春(神奈川県立生命の星地球博物館主任学芸員)
 杓名 貴彦(国立科学博物館理工学研究部研究員)
 佐久間大輔(大阪市立自然史博物館学芸課主任学芸員)
 西田 雅美(公益財団法人日本科学技術振興財団
 科学技術館運営部)
 中井 紗織(国立研究開発法人科学技術振興機構
 理数学習推進部能力伸長グループ)
 畠山 泰英(株式会社キウイラボ代表取締役)
 平濱美紀子(ディスカバリーパーク焼津事業係長)
 船木 茂人(国立科学博物館博物館等連携推進センター
 博物館連携室長)

全科協事務局

国立科学博物館
 博物館等連携推進センター 博物館連携室
 (担当:久保・江森・森永)
 TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898
 info@jcsm.jp
 発行日 平成28年7月1日
 発行 全国科学博物館協議会©
 〒110-8718
 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
 印刷 株式会社セイコー社